

# ニーチェの動物形象

— ツァラトゥストラの動物（蛇と鷲）を中心に —

鈴木康志

## 序

形象とはしばしば心象、映像等と同義とみなされ「心の中に浮かび上がる像＝イメージ」のことを意味する。しかしまたイメージを与えるもの、とりわけ芸術作品における具象的な表現形式を形象と呼ぶことがある。厳密に言えば、イメージとイメージを与えるものとは同一ではない。例えばイメージを与えるものとしての具象的な言語表現はイメージそのものではなく、いわばイメージの一種の図式（Schema）としてあらかじめイメージを一定の方向に規定するものである。そしてその具体化としてのイメージは読者の想像力に委ねられていると言えよう。一般に文芸学、美学においては、ある程度完結したイメージを与える表現形式を「形象（Bild）」と呼んでいる。<sup>(1)</sup>

ところで語はすでにいくらかのイメージをひめている。その意味ではすべての言葉が形象である。ならばこのような単なる言葉の形象と文学における形象、すなわち詩的形象との差異はどこに求められるであろうか。まずよく取りあげられるものに直観性がある。そしてその際には、直観性を補助的に生み出すものとしての修辞手段、とりわけ比喻表現が問題にされる。例えば「情熱」という言葉も「炎のような情熱（直喩）」、「炎の情熱（隠喩）」とすることにより、炎のイメージが重なり直観的なものとなる。しかしながら、その限りで問題となっている形象の直観性とは視覚的なものに限られていることが多い。

ところが、詩的な形象の本質は視覚的な直観化ではなく、<sup>(2)</sup>むしろ表しがたい内面の直観化であることが、さまざまな詩人ないし研究者によりしばしば主張されている。これらの見解によれば、「詩的形象のうちには魂がたち現れている」<sup>(3)</sup>という W. キリーの言葉にみられるように、形象とは単に視覚的な直観化であるだけでなく、「外的な現実の正確な反映以上のなにかをわれわれの想像力へ示唆するもの（C. D. ルーイス）<sup>(4)</sup>」、つまり「月並な言葉では表しが

たい魂の表現（H. ポングス）<sup>(5)</sup>」であり、「何か《より内的なもの》を《請け合っている》か、あるいはそれらと関係している（A. ウォーレン）<sup>(6)</sup>」ものである。すなわち詩的な形象とは、本来表しがたい内的感情や内的認識の形象的、直観的な表現形式であり、詩人が内的に体験したものを概念では語り得ず、創造的な言語形象に託して表したもの、すなわち創造的メタファー<sup>(7)</sup>であると言えよう。そしてこのようなメタファー観はすでに「真の詩人にとってメタファーは、修辭的な文飾ではなく、概念のかわりに實際詩人の目の前に浮かび上がる代理的形象である<sup>(8)</sup>」とするニーチェにおいても見られるものである。

さて本稿は、そのニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』（以下『ツァラトゥストラ』と略記）、すなわち全篇が比喩で語られていると言われる『ツァラトゥストラ』において、そこに現れる数多くの動物が個々に、あるいは総体としていかなる役割を作品の中で果たしているか、さらにそれらの動物のなかから、ここで考察した意味での詩的形象、つまり単なる修辭的な文飾を越え、ニーチェの表しがたい思想を暗示的に映し出すメタファーとして機能している動物形象を取り出し、それらの形象が何を象徴化しようとしているのかについて具体的に考察してみたいと思う。

## I ニーチェの著作と動物

ニーチェの著作には実にさまざまな動物が登場する。その現れ方は処女作『悲劇の誕生』や次の『反時代的考察』にすでに暗示があり、『人間的な、あまりに人間的な』（以下『人間的な』と略記）、『曙光』、『悦ばしき知識』と次第に高まり、『ツァラトゥストラ』において頂点に達する。

ところで一般にニーチェの思想は三期に分けられる。すなわち1876年までの『悲劇の誕生』、『反時代的考察』などのショーペンハウアーやワーグナー崇拜の第一期と、1822年までの『人間的な』、『曙光』そして第三期への過渡期的作品『悦ばしき知識』を中心とする第二期の実証主義の時代、そして「超人」「永遠回帰」等の思想をもつ『ツァラトゥストラ』が第三期である。上記のニーチェの精神的展開における三段階はニーチェ自身も十分自覚していたものであり、前期の自己超克として中期が生まれ、中期の自己超克として後期が生まれたという彼の考えは「ツァラトゥストラの言説」の冒頭、「駱駝（天才崇拜の時代）」から「獅子（否認の時代）」、「獅子」から「小児（創造の時代）」という「三様

の变化」の比喻からもうかがうことができる。また表現方法も上述の三時期はそれぞれ異なっている。すなわち第一期の論文形式、第二期のアフォリズム形式、第三期の「今まで<sup>ポエジー</sup>詩と呼ばれてきたものを千マイルも越えた（Ⅱ巻 1104 ページ）」『ツァラトゥストラ』のような独特の表現スタイル<sup>(9)</sup>そしてニーチェの著作における動物の登場もこの三期の展開に応じているように思われる。つまり論文形式の第一期の著作には歴然とした動物の登場はないし、またあり得ないことである。しかしその中にもいくらかニーチェの動物観を暗示させる箇所はある。例えば『悲劇の誕生』にみられるディオニュソスのものの魔力のもとでの人間と自然（動物）の和解、また『反時代的考察』の「生に対する歴史の利害について」における動物の非歴史性の問題や「教育者としてのショーペンハウアー」の動物が生に悩みながらも自分の生存を形而上学的に理解する力を所有せず、盲目に生に執着する動物の運命について述べられた箇所などである。

そして第二期のアフォリズム形式になると登場する動物も具体的となり、数も急に増すことになる。『人間的な』、『曙光』、『悦ばしき知識』に登場する動物は、蛇、鷲、獅子をはじめ主なものだけでも30種類を越える。これらは個々には、例えば蛇を賢さに、虎を過去の文化の強さに、牛を消極的な人々に譬える比喩的な用法として機能しているものが多い。しかし同時にまたこれらの著作（特に『人間的な』第1巻40番、94番、101番、519番、第2巻第2部 57番、350番、『曙光』26番、261番、286番、333番、『悦ばしき知識』3番、45番、224番、301番、314番のアフォリズム）からは一般的なニーチェの動物観をうかがうことができる。<sup>(10)</sup>勿論これらの言及は人間との比較を中心としたあくまで間接的な動物観であり、そこに一貫した統一性があるわけではないが、その概要は次のような箇所に代表されているように思われる。「動物のようにふるまうことを忘れるために、人間には多くの鎖がかけられてきた。そして実際人間は、道徳的、宗教的、形而上学的表象のこの重く意味深い迷妄の鎖を身につけることにより、あらゆる動物よりも柔和で、精神的で、朗らかで、思慮深いものになった。しかし人間は今もって、こんなに長い間あの迷妄の鎖を身につけていたこと、そしてそのためにこんなに長い間清らかな空気と自由な運動に欠けていたことに悩んでいる。（Ⅰ巻 1006 ページ）」、つまりニーチェは動物と人間の相違を道徳的、宗教的、形而上学的表象の所有の有無に示し、それを所有する人間を、まさにそれゆえ動物よりも下位に置くのである。このような見解が、道徳、宗教、形而上学といった抽象的な観念を所有するゆえ、自らを動物の上

位に置く人間中心的な西洋キリスト教的思考にあっけいかに異端に属するものであるかは言及するまでもないであろう。<sup>(11)</sup>そしてこれらの動物は、ニーチェ自身、F.オーヴァーベックへの手紙の中で「ところで『曙光』と『悦ばしき知識』とを通読すると、ここで問題にしているツァラトゥストラの序論、準備、注釈に役立たないような文章はほとんど一行もないことを見出した（Ⅲ巻 1218 ページ）」と述べているように、個々の比喩的な用法や、また一般的な動物観という点においても『ツァラトゥストラ』にひきつがれていく。

## Ⅱ 『ツァラトゥストラ』における動物

さて「これまで人類に贈られた最大の贈り物（Ⅱ巻 1066～67 ページ）」とニーチェ自身自賛する『ツァラトゥストラ』においては、蛇、鷲、獅子、犬、驢馬をはじめ80種類以上におよぶ動物が頻繁に登場する。<sup>(12)</sup>この登場する動物のおびただしさは動物寓話に匹敵する。実際ニーチェと動物寓話にはおもしろい関係があるように思われる。すなわち『悲劇の誕生』第14章においてイソップ寓話にふれ、それを散文的、理性的なものとして否定的に取り扱いながら、ニーチェは『ツァラトゥストラ』という特殊な寓話を書いたのである。この特殊性とは、寓話が一般に道徳的な教訓を物語の形式で比喩的、象徴的に表現するものであるのに対して、ニーチェの『ツァラトゥストラ』は、道徳自体（支配的なキリスト教道徳）を象徴的に批判した寓話である点にもとめられるであろう。<sup>(13)</sup>ニーチェはバイブルの言葉でバイブルを攻撃し、予言者の身振りでいろいろな予言者に反対している<sup>(14)</sup>のであるから、寓話によって道徳を攻撃するのめいかにもニーチェらしいと言えよう。そしてそのような支配的な観念に対する論駁は、個々の動物によって揶揄的に形象化されることが多い。例えば権力によじ登ろうとする人間を猿に（新しい偶像）、平等を説く者を毒ぐもタランテラに（タランテラ）、ニーチェを理解しなかった学者を羊に（学者）、僧侶を十字ぐもに（離反者）、厭世的予言者を不平をいう熊に（危急の叫び）譬えたり、中でも蛭の脳のみを専門とするあまりに視野の狭い学者を非常なフモールで嘲笑したり（蛭）、近代学者、主にショーペンハウアーのあまりに慎重すぎる認識の仕方を猫の忍び歩きに譬えたりして（無垢な認識）、その比喩の用い方にもニーチェ一流の機智と皮肉があると言えよう。

さらにこれらの動物は、単に個々の比喩的な役割だけでなく、総体として

ニーチェの動物観に相応するような役割を果たしているともみることができよう。すなわち『ツァラトゥストラ』はある意味で「あらゆる既存価値の転換（die Umwertung aller Werte）」の書であり、キリスト教道徳、ショーペンハウアー流のペシミズム、19世紀の生に奉仕するどころか害を与えるのみの歴史主義等の転換をめざすものである。その際「道徳的、宗教的、形而上学的表象の迷妄」をもたない動物は、これらの既存価値の否定に象徴的に作用しているといえよう。例えばわれわれが動物に思いを巡らすとき、彼らの生き方はあまりにも凄惨で、弱肉強食の強いものだけが生き残る世界である。これはなんとキリスト教道徳とかけ離れていることだろう。およそ動物社会にあってはキリスト教的平等主義などまったく問題にならない。さらに動物がペシミズムに陥るようなことがあるだろうか。ニーチェは『ツァラトゥストラ』の中で、ペシミストたちは生まれたときから死を願う、そんなことでどうして生きる価値があるのかと痛烈に批判している。その点動物たちは本能からであるにせよ、どんな凄惨な現実にも直面してもペシミズムを感じることはない。そして生きようとするのである。またすでに触れたように『反時代的考察』の「生に対する歴史の利害について」という論文では、動物の非歴史性について述べられている。確かに動物は非歴史である。過去、とりわけ現在の生と無縁な過去のことを詮索する動物はいないであろう。勿論人間にとっては歴史の利というものもあるが、トーマス・マンが述べているように、<sup>(15)</sup>ニーチェはこの作品で歴史の害だけ述べて、ほとんど利については触れない。それはあまりに歴史主義の過重によって生がむしばまれる危険の中にあっては、歴史の利というものは問題にしえなかったのであろう。それゆえ「生に対する歴史の利」は知らないが、さらによいことに「生に対する歴史の害」を知らない動物がニーチェによってここでクローズアップされるのも理由のないことではない。

このようにみるとニーチェの思想と動物が決して縁のないものではないことが明らかになる。勿論ニーチェにおいて動物が必ずしもいつも積極的なイメージをもつわけではない。個々の動物形象は消極的なイメージをもつものが少なくない。しかしこれらの動物がニーチェの思想の一面に通じる特性をもっていること、またニーチェ自身それを意識していたことは確かである。事実個々の動物形象のなかには、このような動物の特性と密接に結びつき、ニーチェの根本思想そのものを象徴しているものがある。すなわちそれはツァラトゥストラの動物、「蛇」と「鷲」である。この二匹の動物はニーチェの根本思想を表す形象として『ツァラトゥストラ』において極めて重要な役割を果たしている。そ

ここで次にこれらの動物の考察に移ることにしたい。

### Ⅲ 蛇と鷲について

『ツァラトゥストラ』においては、蛇と鷲および獅子はとりわけ重要な動物である。まず蛇の伶俐さについては『ツァラトゥストラ』以外にも「皮を変えるというこの蛇の賢さに心得のある一精神は、どれもこれもまだロマン主義の危険に陥っている今日のベシミストたちに一つの教訓を与える資格があるのではないだろうか（Ⅰ巻 739 ページ）」の他、『人間的な』第2巻第2部74番、『曙光』455番、573番、『悦ばしき知識』165番、259番のアフォリズムなどで、たびたび蛇が脱皮すること（ニーチェ自身思想を変えている）に譬えて、その賢さが象徴化されている。

さらに鷲や獅子については、『人間的な』第1巻168番、『曙光』538番、『悦ばしき知識』314番のアフォリズムにおいて、それぞれ誇り高さ、強さの象徴として述べられている。とりわけ「新しい家畜」と題された314番のアフォリズムは「私は私の獅子と私の鷲を私の身边においておきたい。それも私の強さがどれほど大きいかあるいは小さいかを知るための暗示と前兆にいつも触れていたいからである（Ⅱ巻 184 ページ）」とあるように、なぜツァラトゥストラの洞くつに鷲や獅子がいるのかが具体的に説明されている。その意味でもこのアフォリズムは『ツァラトゥストラ』への序曲とも言えるであろう。勿論『ツァラトゥストラ』においても、蛇が賢さ、鷲が誇り高さ、獅子が強さの象徴となっている点に変わりない。<sup>(16)</sup>これらは、G. Naumann や A. Messer 等の歴史的な注釈書や邦訳の訳注においてもほとんど共通して触れられている。

ところがこれらの動物（特に蛇と鷲）は、単にそのような比喩的な意味だけでなく、詩的形象としてニーチェの『ツァラトゥストラ』における表しがい根本思想を暗示する重要な役割を果たしている。ニーチェの思想は一般に「神の死」、「ニヒリズム」、「運命愛」、「永遠回帰」、「超人」、「力への意志」など断片的な概念で言い表されるが、これらは決して個別的なものではなく有機的に結びついている。すなわち、まずあまりに有名な「神の死」（ハイデガー流に解釈するなら、ヨーロッパ形而上学的世界全体の終焉）があり、この最高の価値の死により、われわれはわれわれを支えてきた理想や目標すべてがその意味を失う「ニヒリズム」の世界に投げ出される。しかしすべてが無意味であると

いうこの現実、ニヒリズムの前に崩れおちないで、その現実を正視し、むしろその一層の徹底としてそのような現実が永遠に変わりなく繰り返すことを確認するのが「永遠回帰」の思想であり、その思想の根底にはこの現実をすべてにわたってよしとする生に対する熱愛、「運命愛」がある。さらに『ツァラトゥストラ』前半における中心的な思想である「超人」とは、まず大地の意義であり、地上的な自己超克の行為そのものを意味する。つまり超人とは既成の価値体系を否定し、これを乗り越えていこうとする者、すなわち永遠回帰や運命愛の使徒に他ならない。また「力への意志」も超人をより一般化したものとして捉えることができるであろう。<sup>(17)</sup>

このようにニーチェの思想を表すこれらの集約的な概念は密接に関係している。しかし『ツァラトゥストラ』における根本思想は、ニーチェ自身も述べているように、<sup>(18)</sup>「永遠回帰」であると言えよう。そして蛇と鷲はこのニーチェの永遠回帰の思想にとって極めて重要な役割を果たしている。すでにM. ハイデガーはその著『ニーチェ』の中で『ツァラトゥストラ』におけるこの二匹の動物の形姿が何を象徴するかを次のように規定している。(1)、鷲の旋回と蛇のとぐるは、永遠回帰の円環と輪を表す。(2)、彼らの本質たる鷲の誇りと蛇の知恵は、永遠回帰の教師の基本的姿勢とその知の在り方を示す。(3)、ツァラトゥストラの孤独に属するこの動物たちとは、ツァラトゥストラ自身に対する最高の要求を表している。<sup>(19)</sup>すなわちハイデガーによれば、この動物たちが象徴しているものは永遠回帰そのものなのである。例えばハイデガーが(1)の規定で触れている

すると見よ、一羽の鷲が大きな円を描いて空中を舞い、その鷲には一匹の蛇が絡みついていた。鷲の獲物ではなく、友であるように、なぜなら蛇は鷲の首に輪のように巻きついていたからである。

(Ⅱ巻 290 ページ)

という形象はあまりに暗示的に永遠回帰を示唆している。鷲が空中に描く大きな円、この旋回が永遠回帰の象徴であること、また鷲の首に輪のように巻きついている蛇、この蛇のとぐるが永遠回帰の輪の象徴であること、これらはハイデガーの言をまつまでもない。そして高みにおいて壮大な円を描いて舞う鷲とその首にまつわって輪をなしている蛇の錯綜した重なりは、ツァラトゥストラの徳性である誇りと賢さの結びつきの象徴であるとともに、それを越え独自の

豊かな永遠回帰の暗示的イメージを作りあげている。

さらにこの動物たちはこの永遠回帰の思想の察知者であり、その思想を美しい言葉で語る者であり、永遠回帰の教師であることがツァラトゥストラの運命であることを彼に告げる者である。なぜこの動物たちはこのように永遠回帰の思想の熟知者なのだろうか。それはまず第一には、動物自身が自然的な周期的生物であり、歴史的にほとんど発展することもなければ変わることもない単純再生産的な動物の生き方は永遠回帰の思想と一致する点が多いし、歴史的に生きる人間と異なり、過去のいっさいのことをなんら悔いることなく生きる動物の方が人間よりもはるかに運命愛の思想に近いものをもっているからであろう。それゆえ卑小なるものの回帰も動物にとっては嘔吐の対象にはならない。そしてさらにその動物の中でも空中における「旋回」と大地における「とぐろ」により絶えず円環や輪のイメージをもつとともに、「高さの誇り」と「脱皮する賢さ」をもつ鷲と蛇がこのような思想の熟知者ないしそれを象徴するものであることも十分理解できる。とりわけ蛇は、上記の形象だけでなく、さまざまに脱皮しながら永遠回帰の思想そのものを象徴する。

『ツァラトゥストラ』においては蛇は、すでに述べたように、ツァラトゥストラの動物として以外にもさまざまに形を変えて登場する。すなわち、いちじくの木蔭で眠っているツァラトゥストラの頸にかみつく蝮（蝮の咬み傷）、太陽にまきつく一匹の蛇（贈り与える徳）、牧人を窒息させる黒い蛇（幻影と謎）、誘惑的な生を象徴する蛇（第二の舞踏の歌）、最も醜い人間と出会う死の谷での緑色の蛇（最も醜い人間）などなどである。<sup>(20)</sup> この中でも永遠回帰の思想と密接に関連して重要なものは、太陽にまきつく蛇の形象と牧人を窒息させる黒い蛇の形象である。

まず太陽にまきつく蛇とは、第一部の終りでツァラトゥストラが「五色の牛」なる名の町を去り山に戻る際、ツァラトゥストラの弟子たちが別れのしるしとしてその師ツァラトゥストラに送った一本の杖の金の握りの図柄であるが、この図柄についてはツァラトゥストラ自身により

この新しい徳、それは力であり、支配する思想だ。そして、それを取りまくのはひとつの賢い魂である。ひとつの金色の太陽と、それを取りまく認識の蛇。  
(Ⅱ巻 338 ページ)

と述べられる。そもそも太陽とは『ツァラトゥストラ』において生の根源を表



す重要な形象であり、ここでは「力への意志」ひいては「超人」を象徴していると言える。そしてそれをとりまいている「認識の蛇」は、驚の首にまきついた蛇と同様「永遠回帰」の輪の象徴とみなすことができる。するとこれは、相互に矛盾する生と認識の結合の象徴であるだけでなく、『ツァラトゥストラ』の二つの大きな根本思想である「超人」と「永遠回帰」の結合を意味していると言えるかもしれない。<sup>(21)</sup>ツァラトゥストラがこの杖をもらって喜ぶのもこのような点と関係があると言えよう。いずれにせよ、蛇のとぐろと永遠回帰に円環というイメージの重なりがあることは確かであろう。

さらに牧人（それは後にツァラトゥストラと同一人物であることが判明する）を窒息させる次のような黒い蛇の形象は何を意味するのだろうか。

一人の若い牧人がのたうち、息をつまらせ、痙攣し、顔をゆがめて苦しんでいるのをわたしは見た。その口からは一匹の黒い蛇が重たげに垂れさがっていた。  
(Ⅱ巻 410 ページ)

これはすこし前の箇所、ツァラトゥストラが自分の考えとその背後にひそむ思想（永遠回帰）に恐怖をおぼえる場面があることから、永遠回帰の思想の消極的な面、卑小なものの回帰、さらにはハイデガーが述べているように、<sup>(22)</sup>ニヒリズムの陰うつな繰り返し、根本において目標も意義もないものの繰り返し、つまり永遠回帰における人間には耐えがたいものの象徴であろう。絶えず向上への意志をもち、歴史的に生きる人間にとって目標も意味もないものの永遠の回帰は耐えがたい苦しみ、とりわけ不気味なものを口につまらせ窒息するような苦しみに違いない。この黒い蛇の形象もこのような連想から生み出されたものに違いない。そしてこのニヒリズムの克服は、牧人が蛇の頭を噛み切る次のような形象によって表現される。

わたしの手はその蛇をつかんで、引きに引いた。——しかし無駄であった！ そのときわたしはわれを忘れて絶叫した「噛め、噛むんだ、蛇の頭を噛み切れ、噛むんだ」……牧人は、わたしが絶叫したとおりに噛んだ。したたかに噛んだ！ かれは蛇の頭を遠くへ吐きとばした——そして跳ね起きた。——  
(Ⅱ巻 410 ページ)

これもハイデガーが引き続き指摘しているように、ニヒリズムが他人によって

蛇を引き抜いてもらうような受動的な態度によっては決して克服されないこと、絶えず窒息の危険に陥っている当事者の噛み切るという能動的な行為、このニヒリズムの現実を「よしもう一度」と決断する行為が必要であることを示している。そして蛇の形象に注目するなら、この黒い蛇は、鷲の首や太陽にまきつく蛇とは対照的なニヒリズムの蛇である。しかし永遠回帰の一面が蛇によって形象化されていることには変わりないと言えよう。

このように『ツァラトゥストラ』においては、蛇と鷲は単なる比喻を越え、永遠回帰の思想にとって極めて重要な形象を構成している。つまり、概念化し得ない思想、永遠回帰を表現するためにニーチェが選びとった、あるいは「最も手近な、最も適切な、最も単純な表現として、おのずから現出<sup>(23)</sup>したものが、このような動物形象であったと言えよう。その意味ではニーチェの動物形象は、最初考察した詩的形象の役割、すなわち、本来表しがたい内的認識の形象的、直観的な表現としての役割を十分に果たしている。勿論『ツァラトゥストラ』における根本思想は、ただ蛇や鷲を中心とした動物形象だけに表されているわけではない。<sup>(24)</sup>しかしニーチェの『ツァラトゥストラ』において、動物形象が根本思想「永遠回帰」の形象として決定的な役割を果たしていることは以上の考察より明らかである。それゆえ、ニーチェにおける動物の意味、さらにこれらの動物形象が果たしている役割について今一度振り返って見ることも意味のないことではないであろう。勿論本稿では『ツァラトゥストラ』を中心にニーチェの発表された作品に限り、重要と思われる二、三の動物の意味を考察したにすぎない。残されたニーチェの遺稿やこの種のテーマに関する諸研究の検討をはじめ、ニーチェのさまざまな動物形象及びその他の重要な形象についての詳細な考察は今後の課題としたい。

#### 【注】

- (1) 『美学辞典』(竹内敏雄編修) 弘文堂 1978年 375ページ。
- (2) 特に H. Seidler: Allgemeine Stilistik, Göttingen 1963, S.155 ff., S.270 ff. ; Die Dichtung, Stuttgart 1959, S.205 ff. Ivo Braak: Poetik in Stichworten, Kiel 1980, S. 36 ff.
- (3) W. Killy: Wandlungen des lyrischen Bildes, Göttingen 1971, S. 5
- (4) C. D. Lewis: The poetic image, London 1955, p.18

- (5) H. Pongs: Lexikon der Weltliteratur, Wiesbaden 1984, S. 124
- (6) R. Wellek, A. Warren: Theory of Literature, New York 1949, p. 192
- (7) すでにこのような意味のメタファーについては触れたので(『筑波ドイツ文学研究』第1号, 第2号), 詳しくは拙稿参照。
- (8) Friedrich Nietzsche: Werke 3 Bde., hg. von Karl Schlechta, München 1977, Bd.1 S. 51 以下この著作からの引用は巻数とページ数を示す。なお引用文はすべて既存の諸訳を参考にした拙訳である。
- (9) 『ツァラトゥストラ』以後はこれらの形式が交互する。例えば『善悪の彼岸』, 『偶像のたそがれ』はアフォリズム形式, 『道徳の系譜』, 『ワーグナーの場合』, 『アンチクリスト』は論文形式, 『この人を見よ』は自伝形式と言えよう。ニーチェの仕事のジャンルについては, 秋山英夫著『魔性の文学ニーチェ』 新潮社 1976年 第一部第二章参照。
- (10) ライプツィヒ学生時代ニーチェが耽読したショーペンハウアーの主著『意志と表象としての世界』でも人間と動物の比較が頻繁に述べられている。(特に16節, 23節, 45節, 55節) それゆえニーチェの動物観にショーペンハウアーの影響をみる見解もある。西尾幹二著『ニーチェ』第二部 中央公論社 1977年 330ページ。
- (11) 動物との親近感の強い日本人に対して, ヨーロッパ人における人と動物の隔絶感, 彼らの動物に対する劣等視が多くキリスト教によるものであることはしばしば主張されている。中村禎里著『日本人の動物観』海鳴社 1984年特に序章。小沢俊夫著『世界の民話』中央公論社 1979年など参照。
- (12) 『ツァラトゥストラ』に登場する主な動物は以下のものである。
- 〔動物〕 猿, 熊, 水牛, 竜, 雄猪, トカゲ, 白熊, 象, 驢馬(雌驢馬), 怠け者, コウモリ, 蛙, 狐, アルプスかもしか, 兎, 犬(雌犬), ハリネズミ, 駱蛇, 家兎, 雄猫, 雌猫, ガラガラ蛇, 鱷, ヒキガエル, 雌牛, 小羊, 獅子(雌獅子), 騾馬, モグラ, 蝮, 豹, 馬, 雌豚, 羊, 蛇, 豚, 雄牛, 虎, スズガエル, 鯨, 山猫, 猪, 狼, 山羊
- 〔鳥〕 鷲, 隼, 梟, 紅鶴, 鷲鳥, 禿鷹, 雄鷄, 雌鷄, 孔雀, 蒼鷺, 駝鳥, 鳩
- 〔昆虫〕 蟻, 蜜蜂, 蛇, ウリハ虫, 蠅, 羽虫, 甲虫, 虱, 螢, 蛆, 蚊, 蛾, 蒼蠅, 蝶, サソリ, 蜘蛛, タランテラ
- 〔その他〕 牡蛎, 蛭, 金魚, 鯉, 海綿, ザリガニ, イカ等々。

ところでこのような動物の登場に対して植物は、林檎、イチゴ、アザミ、樺の木、常春樹、イチジク、亜麻、ユリ、苔、椰子、茸、松、ケシ、胡桃、バラ、サルビア、アシ、葡萄、糸杉等の約20種で、種類は動物の約四分の一、登場する頻度も動物に比べて非常に低い。『ツァラトゥストラ』における植物については、兵頭高夫著『ニーチェと植物―「ツァラトゥストラ」小論』、武蔵大学人文学会雑誌 14巻2号 1982年 123～140ページ参照。なお個々の動物形象が作品の中でどのようなイメージをもっているのかについては別の機会に詳しく論じたい。

- (13) Vgl. H. Yamamoto: Nietzsche und die Fabel, in: Osaka Furitsu Daigaku Doku-Futsu Bungaku Kenkyukai 9 1975, S. 40-49
- (14) 西尾幹二著『ニーチェ』第一部 中央公論社 1977年 33ページ。
- (15) Thomas Mann: Nietzsche's Philosophie im Lichte unserer Erfahrung in: Ausgewählte Essays in 3 Bänden hg. von H. Kurzke Frankfurt am Mein 1982, Band 3 S. 245
- (16) 序説10における鷲の誇り高さ、蛇の賢さ、「三様の変化」における既存の価値体系を破る獅子の強さをはじめ、鷲、蛇、獅子に関しては、このようなイメージが繰り返し現れる。
- (17) ニーチェの思想一般については、藤田健治著『ニーチェ―その思想と実存の解明』中央公論社 1978年をはじめ多くの研究書を参考にした。
- (18) 『この人を見よ』の「ツァラトゥストラ」の箇所で「この作品の根本思想、すなわち永遠回帰の思想……」とか『ツァラトゥストラ』の根本思想である永遠回帰を……」と述べられている。(Ⅱ巻 1128ページ)
- (19) M. Heidegger: Nietzsche 2 Bde, Pfullingen 1961, Band 1 S. 301 (邦訳では、ハイデガー『ニーチェ』3巻 藺田訳 白水社 1977年を参照した。)
- (20) K.レーヴィットは、これらの蛇を外皮を交換した同一の蛇とみている。Vgl. K. Löwith: Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, Stuttgart 1956, S. 134 ff.
- (21) 吉澤傳三郎著『ツァラトゥストラ入門』塙書房 1981年 126ページ参照。
- (22) M. Heidegger: Nietzsche, ibid., S. 441 ff.
- (23) Ⅱ巻 1132ページ。
- (24) 例えば「海」、「太陽」、「小児」等々といった形象も重要である。

## Tier-Bilder bei Nietzsche

--Zarathustras Tiere, Schlange und Adler, stehen  
im Mittelpunkt dieser Betrachtung--

Yasushi SUZUKI

In Nietzsches Werken treten viele Tiere auf, insbesondere aber in "Zarathustra". Bei diesem Aufsatz handelt es sich darum, auf die Bedeutungen der Tiere in "Zarathustra" hinzuweisen und einige bedeutende Tier-Bilder, die in engem Zusammenhang mit Nietzsches Gedanken stehen, aus diesem Werk hervorzuheben und zu analysieren, welche Rolle diese Tier-Bilder darin spielen.

Im allgemeinen wird Nietzsches Gedankenwerk in drei Perioden geteilt: 1. die Zeit der Genieverehrung (bis 1876) Werke: "Die Geburt der Tragödie", "Unzeitgemäße Betrachtungen" 2. die Zeit der Verleugnung (bis 1882) Werke: "Menschliches Allzumenschliches", "Morgenröte", "Die fröhliche Wissenschaft" 3. die Zeit der Schöpfung (nach 1883) Werke: "Zarathustra" usw. Jede Periode hat eigene Ausdrucksformen (Gattung), d. h. 1. Periode: Abhandlung, 2. Periode: Aphorismus und 3. Periode: die spezifische Form wie "Zarathustra". (Aber nach "Zarathustra" vermischen sich diese Formen.) Auch die Art des Auftretens der Tiere entspricht diesen drei Entwicklungen und deren Ausdrucksformen. In den Werken der 1. Periode treten nur wenige Tiere auf, aber sie enthalten schon einige Andeutungen hinsichtlich Nietzsches Tieranschauung. Erst in den Werken der 2. Periode treten viele verschiedene Tiere auf. Diese Tiere fungieren aber meistens nur als Gleichnisse, z. B. die Schlange bedeutet die Klugheit usw. Gleichzeitig kann man aus den Werken dieser Periode die allgemeine Tieranschauung von Nietzsche ablesen. Darin haben die Tiere den Vorrang vor dem Menschen, weil sie im Gegensatz zum Menschen keine "schweren und sinnvollen Irrtümer der moralischen, der religiösen, der metaphysischen Vorstellungen" haben. Bemerkenswert, daß sie im Gegensatz zur europäisch christlichen Tieranschauung steht. Und sowohl die einzelnen Tiergleichnisse als auch diese Tieranschauung dieser Periode münden in "Zarathustra".

In "Zarathustra" treten mehr als achtzig Tierarten auf. Man könnte also "Zarathustra" als eine Art Tierfabel bezeichnen, da diese Tiere gleichnishafte Bedeutung haben. Aber "Zarathustra" ist keine Fabel im üblichen Sinne. Das besondere liegt darin, daß die Tiergleichnisse sich in "Zarathustra" auf keine Moralität gründen, ja die Moral selbst kritisieren. Überdies, so scheint mir, wirken diese Tiere symbolisch in Nietzsche auf das be deutende Thema in "Zarathustra": die Verleugnung aller bisherigen Werte, weil sie eigentlich von den menschlichen Werten (Moral, Religion, Geschichte usw.) entfernt sind. Daher ist es keine Übertreibung, daß diese Tiere im Zusammenhang mit Nietzsches Gedanken stehen. In der Tat gibt es unter diesen Tieren einige, die den Grundgedanken in "Zarathustra", ewige Wiederkehr als solche, symbolisieren. Dies sind Zarathustras Tiere: "die Schlange" und "der Adler".

Wie auch M. Heidegger und K. Löwith sagen, spielen die Schlange und der Adler in diesem Werk eine sehr große Rolle. Z.B. die Bilder vom weiten Kreisen des Adlers und dem Ringeln der Schlange (Vorrede 10) deuten "Ewige Wiederkehr" selbst symbolisch an. Und zwar wissen diese Tiere sehr gut über diesen Gedanken Bescheid. Der Grund dafür, scheint mir, liegt darin, daß sie selbst natürliche und periodische Lebewesen sind und ihr Leben der ewigen Wiederkehr ähnlich ist und sie durch ihr Kleisen und Schlingen immer eine Vorstellung von der "Ewigen Wiederkehr" haben. Vor allem vertritt die Schlange, die in diesem Werk in verschiedenen Gestalten auftritt, diesen Gedanken, z.B. die Schlange um die Sonne (Von der schenkenden Tugend). Dies Bild deutet in gewissem Sinne die Verbindung der zwei Grundgedanken in "Zarathustra" an: "Übermensch" und "Ewige Wiederkehr". Oder eine schwarze Schlange, die in den Schlung des Hirten kroch und ihn erstickte (Von Gesicht und Rätsel). Dies Bild bedeutet die negative Seite dieses Gedanken: Nihilismus, usw.

Aus dieser Betrachtung wird klar, daß die Tiere in "Zarathustra" nicht nur rhetorische Figuren sind, sondern daß sie in engem Zusammenhang mit seinem Gedanken eine bedeutende Rolle, die Verleugnung aller Werte, spielen. Vor allem symbolisieren der Adler und die Schlange als "der nächste, der richtigste, der einfachste Ausdruck" den Grundgedanken Nietzsches: Ewige Wiederkehr.